お茶の水女子大学附属幼稚園

保育の研究

第 2 巻

平成 9 年度

お茶の水女子大学附属幼稚園

幼児教育研究会

幼

はじめに

園長　黒田淑子

本園は、今年、創立121年目を迎えることになり、伝統を受け継ぎながら主体的に、創造的にと、日々の活動を、着実に続けているところである。このたび、前年度に引き続き、『保育の研究』第２巻が刊行されることになった。このように継続して、附属幼稚園での実践研究の成果を発表していくことは意味のあることである。

1994年以来、園内で定期的に行われてきている保育カンファレンスの場は、保育者間の人間関係の形成・発展、個々の保育者の成長、日常の保育につながる問題・課題の探究、大学教官（研究者）と附属幼稚園教諭（実践者）との連携のありかたなど、多岐にわたる、どんなテーマにも取り組める場になってきているように思われる。昨年度の、カンファレンス全体の経緯に関する研究と、今年度の、ひとりの保育者の変容に関する研究は、それぞれ独自な研究であるが、基盤となるところではつながっており、今後もさまざまなテーマでの連続研究が可能なことを示唆している。

特に、今年度の研究に関連させて言えば、この保育カンファレンスは、実践と研究と養成を相即的に行うことのできる、特色のあるカンファレンスとして位置づいていることが明確になっている。つまり、日常の保育と関わりながら、実践しつつ研究が行われ、それは保育者自身の変化・成長のきっかけともなっているのである。

このようなことを可能にするカンファレンスの方法については、「本年度の研究について」で詳しく述べられているが、実践者・保育者が主体的に行う保育の研究の一つのモデルとなり得るのではないだろうか。これからも、保育カンファレンスが続けて行われ、保育界の動向や、附属幼稚園の歴史との関連も明らかにしながら、さらに研究が発展していくことを願ってやまない。

今、附属校園の存在意義が問われているが、まず、このような附属幼稚園ならではの園内研究を進め、この幼稚園としての足場を確かなものにしていくことが必要ではないかと思われる。そうすれば、既に行われてきている、大学や他の附属校との連携教育研究に主体的に関わっていけるし、さらに新たな共同研究、チーム研究、個別研究をも行うことができよう。また社会に向けて、情報を伝達し発信していく拠点としての役割もより充実させていくことができるのではないかと考える。

目　　次

はじめに…… 3

Ⅰ．研究の内容…… 5
　1．本年度の研究について…… 5
　2．保育カンファレンスの検討（Ⅱ）…… 9
　　――ひとりの保育者の変容・自己理解から自己洞察へ――
　　［1］はじめに…… 9
　　［2］方　　法…… 9
　　［3］経　　過…… 9
　　［4］考　　察…… 14
　　［5］まとめ…… 15
　3．カンファレンスの実践例…… 16
　　［1］1995年10月18日のカンファレンスの概要…… 16
　　［2］1996年7月17日のカンファレンスの概要…… 21
　　［3］1996年12月4日のカンファレンスの概要…… 33

Ⅱ．実践者の感想…… 52

Ⅲ．資　　料…… 59
　1．「野球の事例」…… 59
　2．「セーラームーンスティック作りの始まり」…… 60
　3．「N夫のこと」…… 61

あとがき…… 63

Ⅰ．研究の内容

1．本年度の研究について

田中三保子

私たちは3年前から、園内研究として保育カンファレンスに取り組んできている。昨年度は、最初の2年間の成果についてまとめて報告した。後に詳述するが、初めにテーマや方向を決めてから話し合っていったわけではないので、まとめる段階になって、今までの話し合いの中から論文のテーマを絞り込むことになる。その結果、前回は、手さぐりで始め、順調とは言えなかったカンファレンス全体の経過をたどることに重きがおかれた。私たちのカンファレンスそのものについて検討を加え、そこから保育の基盤を探ろうとしたのである。したがって、それぞれの参加者にもたらされた保育者としての変化も、研究主任の立場からの全体的な報告であり、一人ひとりに焦点を当てたものではなかった。

本年度も、研究をまとめるにあたって話し合いがもたれた。前回報告したのはカンファレンス全体の経緯が主であったが、一人ひとりの参加者の気持ちの流れはどうだったのだろうか。前巻の「実践者の感想」にも記したように、それぞれが思い迷ったり納得したりしているわけであるが、必ずしも全体の流れに添っていたとは言えないようである。初めから何でも率直に話せる雰囲気があったわけではなかったので、悩んでいても本音の部分まではなかなか発言できなかった経緯もある。一人ひとりの参加者からとらえると、私たちの保育カンファレンスはどういうものだったのだろうか。また、カンファレンスの結果、保育者を通して保育に還ったものは何だったのだろうか。そこで、今回は、ひとりの保育者の視点からカンファレンスをとらえ直してみようということになった。本研究は、3年間カンファレンスに参加し続けた中堅保育者の内面を見つめることを通して、私たちのカンファレンスを検討し、保育の基盤を探ろうとするものである。

保育には悩みはつきものである。子どもの言動や心情が理解できなかったり、わかっていても受け入れがたかったりする。そういった悩みは、保育者自身に比較的明確に自覚されている場合もあるが、「何となく気になる」「もやもやしている」「自信がもてない」など、漠然とした感覚であることが多い。それに対して、「私だったらこうする」「似たようなケースでこうしたら解決した」というような助言は、当事者の洞察を促す場合もあるが、むしろ、うまくいかないことへの自信のなさを助長したり、プレッシャーを与えたりすることになる。なぜならば、保育はその子（たち）とその保育者との関係の中で生起し、

と言う。三角は３つあったので（図１）、私はＮ夫に「いくつか分けて貸せないかしら？」と問うと、図のように「組み合わせて使うからだめだ」と言う。Ｊ夫に「どういうのを作りたいの？」と廊下に見に行く。確かにもう少しでロボットらしくなるのがわかる。Ｎ夫に「小さい積木ではどう？」と聞くが、「すぐ崩れるからいやだ」と言う。とにかく、しまってあった小さい積木を持って来る。「こうしたらどう？」などと、私が積み始めると、Ｎ夫が自分で作りはじめる。そこで「あの積木は、Ｊ夫くんが使ってもいい？」と聞くと、強い語調で「だめ」と言う。私が困っていると、Ｊ夫は涙を目に浮かべて「Ｊちゃんもういい」と言う。

…（略）…

Ｈ夫がいつもの様に、大声で泣き叫ぶ。行ってみると、小さい積木のトンネルが崩れていて、Ｈおがそこを守るようににおおいかぶさっている。Ｈ夫「だめ、走れないじゃないの」Ｎ夫「だって、神戸大震災なんだもん」と、もめている。私「地震は、こわくていやだから、工事で治しましょう。」ブルドーザーで積木をもちあげるようにしてみる。Ｎ夫「だめ、神戸大震災なんだから」

…（略）…

ちょっとたって見ると、積木が積み治されている。「よかった、地震なおったのね」

…（略）…

外の砂場から、戻ってきたＫ夫が「入れて」と言う。すかさずＮ夫は「だめよ」と言う。Ｋ夫は砂場で汚れていたので、私は「先に着替えましょうね」と声をかけて、手伝う。

その後、何とか線路に加わっていたが、見るとＮ夫は10両くらい、Ｈ夫は5両、Ｋ夫は3両、持っている。1両、転がっていたので、拾ってＫ夫に渡すと「ありがとう」と言う。

…（略）…

この日は、お帰り近くまで、木製レールは使われていた。片付けになるといつのまにかＮ夫は、他のところへ行ってしまい、レールを片付けていない。ちょっとたってＮ夫が戻って来たので「Ｎ夫くんもお片付けしましょうね」と言うが、結局あまりしなかった。

（追記）お帰り後、Ｎ夫の忘れた製作物を引き出しに戻そうとしたら、汽車が８両入っていた。

あとがき

桝　田　正　子

保育実践に直接生かされて、かつその質を高めるような研究を目指したいと考えながら、私たちが園内研究として保育カンファレンスに取り組んで３年が経過した。そして昨年度に続き、今年度も新たな視点で、その成果を報告することができた。

今、われわれの保育現場では、カンファレンスと実践の関係は実に密接であり、研究もまた身近なものとなっている。すなわち、カンファレンスが個々の保育者の実践を支え、その実践がさらにカンファレンスを活性化させて新しい展開を生み出すという循環が成立し、その循環が個々の保育者のレヴェルでも幼稚園全体でも徐々に、しかし着実に成果をもたらしてきているように思われる。教頭という立場で園全体を眺めると、これまで以上に、各保育者がそれぞれの持ち味を生かしつつ、子ども達と共に生き生きと生活を創りだしている様子、子ども達も園全体を生活の場として交流し、それぞれに安定して自分を発揮している様子などが、活気ど共に伝わってくる。この状況は、「今年度の研究について」にも述べられているような本園の保育カンファレンスのあり方、各メンバーの主体的な姿勢などが基盤となって、保育者として互いに信頼して支え合う職場の人間関係が生まれ、機能している状況と考えられる。保育実践と並行してカンファレンスが継続的に持たれていることの重要性を、改めて確認させられる。

カンファレンスと実践が結実したところに何が生起し、それにより幼稚園の保育がどのように変わっていくのか、今後さらに検討をかさね、継続して報告したいと考えている。

研　究　同　人

園　　長	黒　田　淑　子
副　園　長	桝　田　正　子
	田　中　三保子
	吉　岡　晶　子
	伊集院　理　子
	上坂元　絵　里
	中　村　美智子
	佐　藤　寛　子
	田　中　都慈子
本学教官	田　代　和　美

お茶の水女子大学附属幼稚園

保育の研究

第２巻

平成９年12月20日発行

発　行　お茶の水女子大学附属幼稚園
幼児教育研究会
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL. 03－5978－5881
FAX. 03－5978－5882

印　刷　田畑謄写堂
〒112-0012 東京都文京区大塚3-7-2
TEL. 03－3941－1329